美作大学・美作大学短期大学部紀要
2015，Vol．60．65〜73

論　文

短大生が幼児に報酬を分配するときの公正判断について

Distributive justice among junior college students: When they distribute rewards to infants

津　々　清　美

キーワード：報酬分配，短大生，幼児

私たちは労働の対価として報酬を得て生きている。このとき、得た報酬に対して、割に合わないと感じたり、もらいすぎだと感じたりすることがある。このように、ある作業の見返りとして得た報酬をどのように分配すれば公正であるのかという問題がある。Adams（1963）は、それぞれが仕事に貢献した度合い（投入）とその仕事からの見返り（結果）の比率がＡとＢの２者間において等しいとき、公正と判断されるとする公平理論を提唱した（この厳密な比に基づく分配を比例的公平分配と呼び、単純に貢献した度合いによる分配を公平分配と呼ぶ）。これに対して、作業量の違いを無視して各人に報酬を等しく分配することが公正な判断であるとする平等理論（e.g.,Sampson，1975）や公正な分配は状況によって異なるとする立場も出現した(Deutsch，1975)。このように、公正な分配とは何かについて議論がなされてきた。

大人を対象とした報酬分配研究　大人を対象とした報酬分配研究は、社会心理学の分野において多く行われており、ここでは、どのような分配状況のとき、どのような公正判断が行われるのかについて検討されている（e.g.，原田，2006; 田中，1996，松崎・相川・上野，1980; 相川，1981;　奥田，1985; Stanlans & Znser，1985; Shapiro，1975; Aydin & Şahin，2003; Wagstaff，1997)。

研究者によって設定された要因は様々であり、田中（1996，p.38-39）はこれらを次の４カテゴリーにまとめている。一つは個人内要因であり、分配者・被分配者がもつ自己意識や自尊心、共感性などのパーソナリティ属性や性差、分配行動の発達段階における変化である。二つ目は対人要因であり、分配相手が分配者にとって好意的かどうかや、赤の他人か顔見知りかなど分配者と被分配者の近接性や親密性に関する要因である。三つ目は状況要因であり、競争状況や協調状況、内集団か外集団かなどでまとめられている。そして、四つ目は社会・文化的要因であり、西欧圏かどうかや景気、労働市場の状況などである。

子どもを対象とした報酬分配研究　一方、子どもを対象とした報酬分配研究では、道徳的認知構造の一つとして取り上げられ（渡辺，1992，p.15)、公正判断が発達に伴ってどのように変化するのかについて検討されてきた。特に幼児期から児童期の公正判断の発達についてDamon（1975）は、利己的分配から平等分配を経て公平分配へと発達する公正観の発達段階を提唱している。また、文化の異なる日本においてもこの発達的順序性が妥当であることが見出されている（渡辺，1992)。

特に５歳から６歳ごろの年齢から平等分配を行うようになるとされてきたものの（e.g.，Sigelman & Waitzman，1991; McGilliduddy-De Lisi，1994; 渡辺，1992)、５歳児が行う分配は状況によって異なるとする報告もある（e.g.，越中・前田，2004; 越中・

藤澤・新見・江村・目久田・前田, 2005; 津々, 2010; 2013; 2014)。また、作業量の違いを考慮するのは7歳頃からと考えられてきたが（e.g., Damon, 1975)、近年、分配者の利己的動機が働きやすい状況において、利己的動機の関与はあるものの、3歳児が作業量の相違を考慮して分配しているという報告もある（e.g., Kanngiesser & Warneken, 2012)。

報酬分配における報酬量効果の問題　津々（2010）は5歳児を対象とした結果や解釈が様々であることについて、用いられた報酬量が研究者間で異なっていることを指摘し、報酬量の豊かさや乏しさが5歳児の報酬分配に影響する可能性を検討した。その結果、報酬量の豊かさや乏しさによって5歳児の分配パターンや分配理由が変化することを見出している。そして、この報酬量効果が頑健なものであることが津々（2013; 2014）の一連の研究からも確認されている。

近年、善悪判断に関する大人の道徳研究において、意識的・制御的でゆっくりと判断される道徳的推論システムと、自動的で素早く判断される道徳的直観システムの二つの処理過程があるとするSIM理論が提唱されており（Haidt, 2001)、津々（2013; 2014）は報酬分配における公正判断の処理過程にもこれと似たような、報酬の数に基づく自動的システムが5歳児においても存在する可能性を示唆している。

ここまで述べてきた研究は、大人が他の大人たちに報酬を分配するとき、あるいは幼児が他の幼児たちに報酬を分配するときの公正判断である。それに対して、保育・教育という観点から考えると、もう一つの検討課題があると思われる。それは大人（保育者・保護者）が、幼児の行った作業に対してご褒美を分配してやるとき、どのように分配するのが良いと判断するかという問題である。

本研究の目的　上記のように幼児も条件によって平等分配以外を選ぶ人数がかなり多くなることが分かってきたが、そのような条件の下であっても、例えば5歳児の6割程度は平等分配を選択する(e.g.,津々, 2010)。幼児が行う分配に平等分配が多い理由として、親や教師などのしつけが影響している可能性（渡辺, 1992）が指摘されている。また幼児が比例的公平分配よりも平等分配を選好するのは、大人が幼児に対して適用する規範を子どもたちが真似する傾向にあるためだと解釈しているものもある（Wagstaff, 1997)。これを考えると、大人が幼児（5歳児）に対してどのような公正判断により報酬分配をしているかを検討する必要があると思われる。特に、将来、保育士や幼稚園教員を目指す学生が、5歳児に対してどのような公正判断をもっているか、また5歳児（津々, 2010）と大人とではどのような相違があるのかを検討することは、保育・教育においても意義があると思われる。本研究では保育・教育職を希望する学生の5歳児に対する報酬分配の公正判断について検討することを目的とする。

これを検討するには、まず報酬分配課題の性質を確認する必要があろう。津々（2013）は、報酬分配課題とは、“分かち合い”とは異なって被分配者の仕事への寄与・貢献度（数量）と報酬（数量）をどのように関係づけることが公正なのかを分配者に問う課題であるとしている。つまり、将来、保育・教育職を希望する学生が5歳児に対して報酬を分配するとき、報酬量と作業量をどのように関係付けて公正判断を行うのかを検討する必要がある。

本研究では、津々（2010; 2013; 2014）の報酬量効果の検討で用いた紙芝居の写真とその内容を記述した物語を学生に呈示し、この登場人物（幼児）2名に対して学生がご褒美のアメをどのように分配するかを検討する。つまり、学生の幼児に対する報酬分配において、津々（2010; 2013; 2014）で見出された報酬量効果が学生でも見られるかどうかの検討である。また、津々（2010）のデータや結果と比較し、5歳児と学生の公正判断の相違についても検討する。

方　法

参加者　保育士及び幼稚園教諭を養成する短期大学の1年生77名を対象とした。フェイスシートの質問項目が未記入であった1名、設定された報酬数を超えて分配数を記入していた1名、カウンターバランスのアンバランスを解消するためにランダムに選び出され

た3名を除く計72名（男8名, 女64名）を分析対象とした。本研究は、1月下旬の心理学に関する講義時間中に実施した。

実験用紙の構成

フェイスシート　フェイスシートは、前半部分では本研究の目的や倫理的配慮を、後半部分では学年、性別、兄弟数及び出生順序に関する質問項目で構成されていた。倫理的配慮については、精神的苦痛が生じるような質問がある場合には回答を拒否できることや知り得た情報は研究の目的以外では使用しないこと、またデータは全て匿名化されて処理されることが記されていた。また、前半部分の研究の目的や倫理的配慮を確認したうえで、研究に協力できる場合にはそれ以降の質問項目に回答するよう明記されており、これによって参加者が同意したかどうかを判断できるようになっていた。

報酬分配課題　始めに幼稚園の年長組に在籍する2人の幼児が作業を開始してから終了し、そしてご褒美のアメをもらったとするまでの粗筋を津々（2010）で使用された紙芝居の写真と一緒に呈示した。ご褒美のアメの数は3条件設定されており、4個、12個、20個の三つであった（それぞれ, 4条件, 12条件, 20条件である）。この総報酬量は、津々（2010）の総作業量12個物語で設定された総報酬量条件と同じであり、常に各登場人物が行った作業量の合計（総作業量）と同じ12個（12条件）が実験用紙の一番最初に記されていた。そして、この12条件を統制条件として、4条件と20条件の呈示順序がカウンターバランスされたものが作成された。また、この物語に登場する人物の性別は参加者と同性とし、性別ごとに、登場人物の左右位置や作業量の大小の左右位置もカウンターバランスした実験用紙を作成した。

この報酬分配課題は、津々（2010）で使用された実験材料及び手続きとほぼ同じようにして作成された。；“AちゃんとBちゃんは、幼稚園の年長組にいる女の子（男の子）です。ある日、Aちゃん（君）とBちゃん（君）は、もうすぐ七夕の日がくるので笹に飾る星を作ろうと思いました（津々（2010）の導入部分で使用した紙芝居の写真を一緒に呈示した）。そして、早速、黄色い折り紙を持ってきて星を折り始めました。・・・。しばらくして見てみると、Aちゃん（君）は星を3個、Bちゃん（君）は星を9個作っていました（津々（2010）と同じ2人が作業を行った様子を表す紙芝居の写真を一緒に呈示した）。この星を作ったご褒美に2人は先生からアメをもらいました。でも、どうやって分けていいのかわからず困っています。”と書かれていた。

そして、その後、この物語の登場人物（幼児）に対して、どのようにアメを分配するのが一番良いかを尋ねる質問項目が記載された。質問1では、2人の登場人物がそれぞれ作った星の合計数と同じ、12個のアメをAちゃんとBちゃんに分けてあげる場合、2人に何個あげるのが一番いいかを数字で答えるよう求めた。その後、どうしてそのようにあげるのが一番よいと思ったのかその理由を書く欄が設けられた。質問2ではご褒美にもらったアメが“もし4個しかなかったら”あるいは“20個とたくさんだったら”どのようにあげるのが一番良いかを尋ねるようになっていた。質問3では質問2で呈示した条件とは別の報酬数を呈示した。それ以外は全て12条件と同様の構成になっていた。

手続き　講義時間中に一斉に回答用紙を配布し、全員に配り終えたところで、本研究の目的、倫理的配慮についてフェイスシートを基に説明を行った。そして、本研究に同意する場合は、これ以降の質問に各自答えるよう教示した。また、回答順序は回答用紙に記している通り質問番号順に回答してもらうよう求めた。回答が終わり次第、順次、回答用紙を回収した。所要時間は1人につき10分程度であった。

結果と考察

分配パターン　参加者が各登場人物にあげたアメの数から、津々（2010）の分類法を用いて、公平分配、平等分配、逆転分配の三つの分配パターンに分類したところ、全ての条件において逆転分配を行った参加者

はゼロであった。この場合、二項分布が使用できるため、McNemar 型の直接確率法を用いて分析する。

総報酬量によって分配パターンに違いがあるかどうかを調べるため McNemar 型の直接確率法を行った。ただし、2 条件ずつ比較することになるので、有意水準の調整として Bonferroni 法を採用する（α=.017：.05/3）。その結果、4 条件と 12 条件の間に違いが見出された（p=.008, p<.017）。それ以外の 2 条件の間には有意な違いは見られなかった（4 条件対 20 条件: p=.375, ns.; 12 条件対 20 条件: p=.125, ns.）。

4 条件では参加者のほぼ全員（95.83%）が平等分配を行っているのに対し、12 条件では 84.72%であり、20 条件では 91.67%であった（Table 1）。このように、平等分配を行った参加者の割合は、3 条件全てにおいて多いことが分かる。しかし、12 条件では平等分配の割合が他の二つの条件より若干低くなっており、特に 20 条件よりも 4 条件との間において差が見られるため、4 条件と 12 条件の間に有意な違いが検出された。これらの結果から、5 歳児と同じように、短大生が幼児に対して報酬を分配するときにも、乏しいときには平等分配が行われやすく、ある程度豊かなときには公平分配が行われると解釈できよう。

ただし、4 条件対 20 条件の間に有意な相違が検出されなかった点については興味深い。津々（2010）の 5 歳児を対象とした結果ではこれらの条件の間に有意な相違があったのに対し、本研究では検出されなかった。その理由として、参加者と物語の登場人物が同年齢でなかったことが挙げられよう。つまり、大人の視点に立ったとき、年齢の小さい幼児に対して“優しくしなければならない（してあげたい）”や豊かすぎると“あげすぎたらいけない”などの配慮が誘発され、その結果、平等分配が多く行われたのかもしれない。それに加えて、本研究の参加者は将来、保育士や幼稚園教諭を目指す学生であり、幼児に対して関心が高かった点もこれに影響した可能性が考えられる。

この点については、後述の分配理由の分析のところでも再考するが、津々（2010）の 5 歳児の分配パターンと今回の短大生の分配パターンに相違があるかどうかを検討することでも、さらにこの可能性について再考できると思われる。

そこで、Fisher の直接確率法を用いて分配者の年齢（5 歳児, 学生）による相違があるかどうかを分析したところ（α=.017）、12 条件と 20 条件に有意な年齢の違いが見出された（ps<.001）。他方、4 条件には有意な相違は検出されなかった（p=.058）。4 条件で平等分配をした 5 歳児（津々, 2010）と本研究の短大生の差は 10.62%と少ないのに対し、豊かな 12 条件や 20 条件では約 30%近い差が見られる。このことは、津々（2010; 2013; 2014）で解釈したように、短大生においても報酬が乏しいときには数に関する自動的システムが関与して行われた可能性を示唆しているように思われる。

分配理由　参加者が回答した分配に対する理由付けは津々（2010）の分類法を参考にしつつ、実験者を含む 2 名の評定者により分類され、内容的類似性が高いものをまとめて、最終的に 10 カテゴリーに分類された。ただし、二つ以上の理由を含む回答が記述されていた場合には、最初の理由付けを分類対象として採用した。これは、最初に述べたことが参加者の重要な理由付けであると判断したからである。しかし、判断が難しい場合もあった。例えば、“平等が良い。喧嘩にならないようにするため”という回答が行われていた場合、次の二つの可能性が考えられる。一つは、理由付けの回答としては“喧嘩にならないようにするため”で十分なはずであるのに、わざわざ“平等が良い”と先に回答されていた場合、“平等が良い”ということが非常に強く意識されていた可能性が考えられる。この場合、後に回答された “喧嘩にならないようにするため”は、“平等が良い”をさらに強調するためのものであると解釈して分類した。もちろん、その逆の可能性も考えられる。しかし、レポートや論文を書くよう求めているわけではなく、自由記述による回答であるので、ここでは最初に書かれていた理由付けの方が参加者にとって重要であった可能性が高いと判断し、このような方法で分類した。いずれにせよ、一貫してこのかたちで分類し、統計的分析を行うため、これを

採用する。

分類されたカテゴリーは、理念、平等主義、作業量、作業自体を評価、喧嘩回避、可哀想、報酬量、能力差無視、無回答、その他の10である。本研究では短大生を対象としており、5歳児を対象とした回答とは多少異なる。例えば、“星を何個多く作ったとかではなく、作ったことを褒めるべきであるから”のように、教育やしつけに関して、こうすべきであるという理由付けを“理念”とした。また、“個人差があるのは仕方がないから”のように個人差を無視した理由付けは“能力差無視”とした。このため、津々（2010）の分類は参考とするに留めた。分配理由は実験者を含む2名の評定者によって評価され、理由付けが二つ以上含まれる場合には、最初の理由により評価した。また、分類が分かれた場合には評定者間の協議により決定された。一致率は80.56%であった。

条件によって分配理由に相違があるかどうかを調べるために、McNemar − Bowker検定を行ったが、ゼロになる箇所が多く、全てのカテゴリーで分析すると信頼性の点で問題があるため、内容的類似性が高いと判断したものをまとめて、平等主義、作業量、作業自体を評価、思いやり（喧嘩回避、可哀想）、その他（理念、報酬量、能力差無視、無回答、その他）の5カテゴリーとした。

分析結果、4条件対12条件と12条件対20条件に有意な相違が見出された（4条件対12条件; $\chi^2(10)=30.33$, $p=.001$; 12条件対20条件: $\chi^2(8)=25.33$, $p=.001$）。4条件対20条件には違いはなかった（$\chi^2(8)=5.00$, $p=.76$: ns.）。4条件では平等主義が45.83%と約半数近くを占め、次いで2人が作業を行ったことへの評価は22.22%であった。作業量を理由に挙げた参加者は2.78%とわずかであった。他方、12条件では、2人が作業を行ったことを評価する理由づけが37.50%と一番高く、次にその他（22.22%）という順序であった。また、それ以外の理由付けも10%以上は述べられていた。20条件では、平等主義が44.44%と一番高く、次に、2人が作業を行ったことに対する評価が22.22%となっている。20条件と4条件の理由付けにおける割合はほぼ同じであるため、有意な差にならなかった。

他方、12条件は、4条件とも20条件とも異なっていた。12条件では、2人の頑張りを評価する割合が一番高くなっている。この理由付けは、“どちらも星を作ったから”というように、作業量に違いはあることを認識してはいるが、それよりも、作業を行ったことや2人とも頑張って星を作ったことの方をより評価したということを意味している。他方、乏しすぎる4個や豊かすぎる20個のときは、平等主義が約45%であった。乏しすぎても豊かすぎても幼児に対して配慮するべきであるということが影響して“平等が良い”と回答されやすかったのかもしれない。この点については後述する分配理由と分配パターンの関係からも検討していく。

分配理由については、5歳児が答えた分配理由と短大生が答えた分配理由とでは若干回答が異なるため、津々（2010）の結果と直接比較して分析することができない。そこで、ここではどのような理由付けがなされたのか簡単に比較するに留める。5歳児の理由付けでは見られなかった理由付けとして、“理念”がある。また、5歳児では、12個は6個と6個に分けることができるといった“論理・数学的”やわからないと答える“積極的無回答”、これだけしかアメがない（こんなにたくさんアメがある）からというような“報酬量”が多く述べられたが、短大生ではこれらの割合は小さく、“平等主義”や“作業自体への評価”が大半を占めていた。

分配パターンと分配理由の関係　分配パターンと分配理由の関係を調べるために、分配パターンを2カテゴリー、分配理由を10カテゴリーとして、Fisherの直接確率法を行った（$\alpha=.05$）。その結果、全ての条件において有意な関係が見出された（ps<.05; 4条件: $p=.021$; 12条件: $p=.000$; 20条件: $p=.0003$）。

Table 1を見ると、どの条件においても平等分配を行った参加者は“作業量”以外の理由づけで正当化しているのに対し、公平分配を行った参加者は“作業量”による理由付けを行っていることが分かる。特に、平等分配を行った参加者の大半が“平等主義”や2人と

も頑張ったから（作業を行ったから）という“作業自体を評価”する理由付けを行っている。このことから、将来、保育士や幼稚園教諭を目指す学生は幼児に報酬を分配するとき、乏しすぎる4個のときや豊かすぎる20個のときは“平等主義”や“作業自体を評価”して平等分配を行うのに対し、乏しすぎず豊かすぎない12個のときには “作業量”の違いに着目して公平分配を行う短大生もいるということを示している。また、この 12条件で平等分配を行った参加者の理由付けは、分配理由のところでも述べたように、作業を行ったことを評価する理由付けが37.50%と最も多かった。これは、作業量の相違を理解していながらそれを無視して平等分配を行ったということであり、自身の矛盾した判断を正当化するためにこの理由付けを述べたのかもしれない。つまり、この条件で平等分配を行い、かつ、作業を行ったことを評価する理由付けを述べた参加者は、作業量の違いを無視するために言い訳を行ったという可能性である。

Table 1. 分配パターンと分配理由の関係

	理念	平等主義	作業量	作業自体を評価	喧嘩回避	可哀想	報酬量	能力差無視	無回答	その他	計
4条件											
平等	1[a](1.39)[b]	32(44.44)	0(0.00)	16(22.22)	7(9.72)	3(4.17)	5(6.94)	2(2.78)	2(2.78)	1(1.39)	69(95.87)
公平	0 (0.00)	1(1.39)	2(2.78)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	3(4.17)
計	1 (1.39)	33(45.83)	2(2.78)	16(22.22)	7(9.72)	3(4.17)	5(6.94)	2(2.78)	2(2.78)	1(1.39)	72(100.00)
12条件											
平等	3 (4.17)	10(13.89)	0(0.00)	27(37.50)	6(8.33)	2(2.78)	0(0.00)	9(12.50)	0(0.00)	4(5.56)	61(84.72)
公平	0 (0.00)	0(0.00)	9(12.50)	0(0.00)	1(1.39)	1(1.39)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	11(15.28)
計	3 (4.17)	10(13.89)	9(12.50)	27(37.50)	7(9.72)	3(4.17)	0(0.00)	9(12.50)	0(0.00)	4(5.56)	72(100.00)
20条件											
平等	1 (1.39)	32(44.44)	1(1.39)	16(22.22)	6(8.33)	2(2.78)	4(5.56)	1(1.39)	2(2.78)	1(1.39)	66(91.67)
公平	0 (0.00)	1(1.39)	5(6.94)	0(0 .00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	6(8.33)
計	1 (1.39)	33(45.83)	6(8.33)	16(22.22)	6(8.33)	2(2.78)	4(5.56)	1(1.39)	2(2.78)	1(1.39)	72(100.00)

a 数字は、人数を示している。
b カッコの中の数字は、割合を示している。

総合的考察

本研究の目的は、大人が子どもに対して報酬を分配する際、報酬量の豊かさや乏しさによって分配パターンや分配理由が異なるかどうかを検討することであった。また、津々（2010）の紙芝居に登場する5歳児に対して同年齢の参加児がご褒美を分配した結果と比較することも目的としていた。

分配パターンの報酬量効果について、短大生が幼児に対して報酬を分配する場合、総報酬量が乏しい4個のときと豊かな12個のときとでは異なることが見出された。12個のときに平等分配を行った参加者は85%程度と多いものの、乏しい4個のときは96%程度と圧倒的に平等分配が多く行われ、この違いにより両条件に有意な相違が見出された。この結果は5歳児が分配者になったときと似ている。

ただし、5歳児の場合12条件で平等分配を行った割合は59%程度であり、4条件では85%程度であって（津々, 2010）、5歳児の方がこの条件間での相違は大きい。短大生の場合、豊かな12個や20個の間の相違がなく、しかも幼児とは異なり、乏しい4個のときと豊かな20個のときの違いは検出されなかった。20個のときに平等分配が行われた割合は92%程度であり、12個よりも高い割合であったため、4条件との相違が明確でなくなっている。もともと4条件での平等分配が5歳児よりも多いことも関係しているが、短大生が幼児に対して、豊かな20個のときには“あげすぎないようにしなければならない”ということが影響して“平等主義”や“作業を行ったこと自体に対する評価”が多くなり、これらの間に違いが見られなかったのかもしれない。実際に、“平等主義”と“作業を行った

こと自体に対する評価”の割合は同程度であり、理由付けの相違も見出されなかった。

しかし、4 個と 20 個のちょうど中間である 12 個では、4 個や 20 個のときに生じたような配慮がちょうど同程度になりやすい報酬量なのだとすれば、以下のようなことが考えられる。

4 個のときは“報酬量”や“登場人物（幼児）”に着目されやすく、作業量の違いを無視して“同じにするのがよい”ということが生じて上記のような配慮が生じやすかった。これに対し 20 個のときには“登場人物（幼児）”や“報酬量”、そして作業量に応じて分配するのがよいと思っていたとしても、作業量に応じて分配してしまうと作業量の多い登場人物（幼児）が大人から見て沢山になりすぎてしまうので、小さい子にはあげすぎないようにしなければいけないという配慮が生じて 4 条件よりも若干“作業量”に着目しやすかったのかもしれない。ただし、この条件での配慮は、公平分配を減らして平等分配が増えるように働く。そして、このような“作業量”に関連して生じる配慮があるとして、12 個条件では次のようになると考えられよう。12 条件で公平分配を行った参加者が 12.50 %おり、またその参加者の理由付けは作業量に集中している。また、平等分配を行った参加者の約半数が作業を行ったことを評価する理由付けを行っている。このことは、分配理由と分配パターンの所でも述べたように、作業の相違を認識してはいるものの、それを無視するために言及されたものであると考えられ、総報酬量が 4 個と 20 個のちょうど中間に位置する 12 個は、作業量の相違を意識しやすい報酬数であるのかもしれない。これが正しければ、平等分配を行った理由づけに、“平等主義”が減り“作業を行ったこと自体を評価”することが増えたこと、また“作業量”の理由付けも増えたこととも一致する 。そして、これによって平等分配を行う参加者はかなり多いものの、“作業量”にも着目した公平分配も行われたこととも一致するように思われる。

これを考えると、報酬数が 12 個のときに短大生が幼児に報酬を分配する条件では、幼児へ分配するときは配慮しなければならないと思うことと数の認知が拮抗して、公正判断を行う際に、注意資源を要しゆっくりと判断される制御的・意識的過程が関与して行われた可能性が考えられる。一方、 4 条件には年齢による相違が見出されなかったことから、津々（2013; 2014）で解釈したように、一目見て何個あるかが分かるスビタイジング能力が影響して、短大生でも乏しい 4 個のときは数に関する自動的な判断になりやすい可能性が考えられる。つまり、報酬自体が乏しいときには“平等にしなければならない”という自動的な判断が生じやすかったのであろう。そして豊かな 20 個のときは、津々（2013）で解釈したように、豊かなことが影響して自動的判断になる場合とそうでない場合の両方が考えられるため、このときの判断処理過程については何とも言えない。なぜなら、少ない（乏しい）／沢山だ（豊かだ）という判断と幼児にはあげすぎたらいけないなどの配慮の両方が働くと推測されるからである。いずれにせよ、短大生においても 5 歳児と同じような判断が見られたことは興味深いと思われる。

ただし、5 歳児では 4 条件と 20 条件の間に有意な相違があったのに対し、短大生では検出されなかった理由の一つとして、12 条件が本研究において特別な位置づけであったことが関係しているかもしれない。12 条件は、多い/少ないを印象付けるために統制条件として設定しているが、5 歳児の研究では、課題の理解や数の把握、記憶の負担を減らすなどのため、他の 2 条件を実施する間も終始、作業量を表す紙芝居を呈示し続けた（津々, 2010；2013；2014）。しかし本研究では、参加者は短大生であるため、課題の理解や数の把握、記憶には問題ないと判断して、4 条件と 20 条件の質問が記述されているシートには紙芝居を呈示しなかった。しかし、これによって何らかのバイアスが多少とも生じた可能性を否定できないため、このバイアスが全くなかったかどうかは今後の検討が必要であろう。さらに、報酬一単位自体の価値や作業内容などについても今後、詳細に検討していく必要があると思われる。

引用文献

Adams, J. S. (1963). Toward an understanding of inequity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 422-436.

相川充　(1981). 報酬分配における個人決定と集団決定について　心理学研究, 52, 113-119.
(Aikawa, A. (1981). Individual vs. group decisions on reward allocation. *Japanese Journal of Psychology*, 52, 113-119.)

Aydin, O. & Şahin, D. N. (2003). The effect of different types of reward allocation of future work partner preferences: an indirect test of the self-interest view *Social Behavior and Personality*, 31, 133-142.

Damon, W. (1975). Early conceptions of positive justice as related to the development of logical operations. *Child Development*, 46, 301-312.

Deutsch, M. (1975). Equity, equality, and need: What determines which value will be used as the basis of distributive justice? *Journal of Social Issues*, 31, 137-149.

越中康治・前田健一　(2004). 被分配者の努力要因が幼児の分配行動に及ぼす影響　広島大学心理学研究, 4, 103-113.
(Etchu, K., & Maeda, K. (2004). Effect of recipients' effort factor on preschoolers' reward allocation. *Hiroshima Psychological research*, 4, 103-113.)

越中康治・藤澤康恵・新見直子・江村里奈・目久田純一・前田健一　(2005). 幼児の分配行動に及ぼす被分配者の努力・能力要因の影響　広島大学心理学研究, 5, 177-185.
(Etchu, K., Fujisawa, Y., Niimi, N., Emura, R., Mekuta, J., & Maeda, K. (2005). Effects of recipients' effort and ability factors on preschoolers' reward allocation. *Hiroshima Psychological Research*, 5, 177-185.)

Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108, 814-834.

原田耕太郎 (2006). 報酬分配における公正認知に関する研究　大学教育出版
(Harada, K.)

Kanngiesser, & Warneken, (2012). Young children consider merit when sharing resources with others. *PLoS ONE*, 7, 1-5.

松崎学・相川充・上野徳美 (1980). 報酬分配における将来の相互作用への期待の効果―被分配者の存在との関連において―　心理学研究, 51, 120-127.
(Matsuzaki, M., Aikawa, M., & Ueno, T. (1980). The effects of expectation of future interaction on reward allocation: the role of the allocation partners's presence, *Japanese Journal of Psychology*, 51, 120-127.)

McGillicuddy-DeLisi, A. V., Watkins, C., & Vincher, A. J. (1994). The effect of relationship on children's distributive justice reasoning. *Child Development*, 65, 1694-1700.

奥田秀宇 (1985). 報酬分配における利己主義と対人魅力　心理学研究, 56, 153-159.
(Okuda, H. (1985). Self-interest in reward allocation and interpersonal attraction. *Japanese Journal of Psychology*, 56, 153-159.)

Sampson, F. E. (1975). On justice as equality. *Journal of Social Issues*, 31, 45-64.

Shapiro, E. (1975). Effect of expectations of future interactions on reward allocations in dyads: Equity or equality? *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 873-880.

Sigelman, C., & Waitzman, K. (1991). The Development of distributive justice orientations: Contextual influences on children's resource allocations. *Child*

Development, 62, 1367-1378.

Stalans, L. J., & Zinser, O. (1986). Reward allocation by impartial allocators to friend or stranger co-workers under equal and unequal ability and performance. J*ournal of General Psychology*, 113, 227-233.

田中堅一郎 (1996). 報酬分配における公正さ―社会心理学的考察―　風間書房
(Tanaka, K.)

津々清美 (2010). 報酬量の違いが5歳児の報酬分配行動に及ぼす影響　心理学研究, 81, 201-209.
(Tsutsu, K. (2010). Influences on the amount of the reward: How five-year-old children distribute rewards. *Japanese Journal of Psychology*, 81, 201-209.)

津々清美 (2013). 5歳児の報酬分配における総報酬量と泣き顔の効果　心理学研究, 84, 354-364.
(Tsutsu, K. (2013). How five-year-old children distribute rewards: Effects of the amount of reward and a crying face. *Japanese Journal of Psychology*, 84, 354-364.)

津々清美 (2014). 5歳児の報酬分配における総報酬量と意外な泣き顔の効果　日本心理学会第78回大会発表論文集
(Tsutsu, K. (2014). Effects of the amount of reward and unlooked-for crying face: How five-year-old children distributed and justified?)

Wagstaff, G. F. (1997). Equity versus equality in allocations to adults and children. *Journal of Social Psychology*, 137, 445-448.

渡辺弥生 (1992). 幼児・児童における分配の公正さに関する研究　風間書房
(Watanabe, Y.)

Abstract

Junior college students were presented a story in which two infant-characters made Origami stars; one made 3 stars and the other made 9 stars. Three reward-amount conditions were employed; equal to (Middle-N), less than (Small-N), or more than (Large-N) the total number of stars. The participants were asked how many should be distributed rewards to each of two characters, and then, they answered for their reason. Reward distributions were different between Small-N and Middle-N conditions. Justifications were different between Small-N and Middle-N conditions, and between Middle-N and Large-N conditions. The difference between Junior college students' judgments of reward distribution and five-year-old children's for infant-characters were discussed.

謝　辞

本研究にあたりご助言いただきました美作大学の妻藤真彦先生、調査に参加していただいた学生の皆さんに御礼申し上げます。